特集―海と島の日本・XII

・文化資産としての島の生活誌　川口祐二……19
・海と島を再生する答志島の若い力　鈴木さわこ……32
・野鳥から見えてくる日本の島々の重要性　日本野鳥の会　山本　裕／小林　豊……44
・野鳥は島の宝物　バード・アイランド二宅島　日本野鳥の会　篠木秀紀……54
・ヲナリの比禮振り、ヲウナの布晒　菅田正昭……66

文化資産としての島の生活誌

川口祐二

二〇年以上にわたって島を含めた日本全国の漁村をめぐり、六〇〇人もの人たちから話を聞き続けてきた著者。とりわけ女性たちを中心とした聞き書きの旅をとおして見えてきたのは、厳しい環境下でもたくましく生きる人々の姿である。こうした人の暮らしこそが島の貴重な文化資産ではないか――。島の生活誌やさまざまな人生模様を記録に残すため、これからも地道な旅はつづく。

満身創痍の島々の漁村をあるく
特有の暮らしとかけがえのない人生模様こそが島の魅力
豊かだった島の暮らしを物語る瀬戸内海の古い石垣の集落
ブナ林が豊かな海を守っている北の島にて

満身創痍の島々の漁村をあるく

日本の漁村を歩いて、そこに住む人びとから、昔の話を聴き、今のことをうかがって、それらを聞き書きとしてまとめようと決心したのは、一九八九年早々であった。昭和から平成へと年号が変わったときである。定年までの三年を残して、それまでの地方公務員（町の役場職員）を辞めた。だから、私の新しい仕事は平成の年号とともにある。漁村歩きの仕事は、早いもので二三年目に入った。

聞き書き集の一冊目は、『女たちの海――昭和の証言』（ドメス出版）という。一九九〇年八月に出た。その後、二〇一〇年六月に出た『島をたずねて三〇〇〇里』が一二冊目である。他に一冊、共著『伊勢湾は豊かな漁場だった』があるし、別に、みえ熊野の歴史と文化シリーズ（一〇冊出版されている）の中にも幾編かを書いている。

漁村歩きを決心させたものは何か。もちろん敬愛する宮本常一氏の諸作、特に『海の民』や『忘れられた日本人』などに触発されたことはたしかであるが、それ以上に背中を押されたのは、加藤周一氏の次の一文であった。

思うに歴史を理解するには、近接して個別的な状況を見る必要があり、また同時に遠望して天下の形勢を察する必要がある。

これは、岩波新書別冊2の『私の昭和史』の冒頭の「さまざまな昭和史」と題する、編者加藤周一氏のまえがきの中にあるもの。私は岩波書店が昭和時代にかかわる随想を募集したとき、「渚の五十五年」と題した小文を投稿し、はからずもそれが選者の目にとまり当選した。一五編の当選作が一冊となって世に出て、多くの反響を呼んだ。このことが、漁村を歩くという、いつ果てるともわからない仕事をスタートさせたのである。幾つかの漁村を歩くうち、島には必ず漁村があると再確認する。日本人は魚食の民だ、そう言われていながら、食生活からは魚ばなれが目立ち、それだけ漁村は疲弊する。環境問題の面から考えても、陸上からの汚水はすべて漁村が最終地点だ。このような現状の中で暮らす人びとから、話を聴こうと思い立った。島もご多分にもれず満身創痍のはずである。そうなれば「島」ははずせない。この思いが強くなっていく。バスを乗り継いで見知らぬ漁村を目ざす。船に飛び乗り、島をたずねる。港から島への小さな旅は回数を増していった。それでもごくわずかとしかいえない。

利尻島、天売（てうりとう）島、焼尻島、奥尻島、飛島、粟島、能登島、見島、これらが日本海の島である。太平洋側はどうか。北から、網地（あじしま）島、田代島、初島、佐久島、日間賀島、篠島、

小値賀町斑島で出会った島の女性。

神島、答志島、菅島、坂手島、間崎島、紀州大島へと聞き書きのために渡っている。

瀬戸内海では、沼島と淡路島、そこから西へ順次列記すれば、次の島々だ。坊勢島、鴻島、豊島、真鍋島と六島、佐柳島、高見島、野忽那島、など、広島県では豊島、山口県の瀬戸内側では、周防大島、浮島、それに彦島がある。九州では、天草の上島と下島、御所浦島、それに、宮崎県の島野浦島へは二度行った。長崎県では、崎戸島、壱岐、対馬、小値賀島。斑島と野崎島は小値賀町であり、鹿児島県では、甑島列島の三島、つまり、上、中、下の三甑島へ二度たずねた。

沖縄本島へは糸満で話を聴くためであり、竹富島へは一度きりだが、西表島へは二度たずねて行って、戦時中のマラリアを患って亡くなる、波照間島から強制疎開させられた人びとの悲劇を聴いた。もう一つ、琵琶湖に浮かぶ沖島も落としてはならない。これらの島の中には、すでに橋で本土とつながっているところもある。私の島めぐりは、緒についたに過ぎない。

今までにたずねた漁村は三四〇ヶ所、話を聴いた人六〇〇人近く、仕事は現在も続いているから、数は増えていく。しかし、その中で島は右に揚げただけである。決して自慢できる数ではない。長いとか多いとかでなく、どれだけ真摯に島人と相語り、聴き取り、人びとの心に触れあったか

が問われなければならない。どれだけ心をこめて記録をしたかが問われるとき、まだ途なかばとしか言えないのである。このことを自問自答しつつ、私はまた、次の島を探し、話が聴ける人をたずねて、島へ渡る小さな旅を続ける。

特有の暮らしと かけがえのない人生模様こそが島の魅力

一つでも多くの島を回ろうと思うきっかけになったのは、北海道の天売、焼尻二島へ渡ったときのことだ。一九九一年七月上旬であった。

当時の季刊『しま』で、羽幌町教育委員会の職員がこの二島を紹介している一文を読んだ。たずねたい、どんな島なんだろうと想像をめぐらしていた矢先、思いがけない仕事が舞い込む。ＮＨＫの外国放送で、あなたの仕事を紹介する番組を作りたい、どこかへ行ってくれないか、と言う。それならと、羽幌行きを決めた。ラジオ放送の録音だから、ディレクター一人が同行、二人連れの北の旅である。

焼尻で船をおり、船着場の食堂でタコカレーを食う。オンコの森を歩いた。オンコとはイチイのことである。あちこちに生えるオオイタドリの葉が大きかった。帰りに丘の上に建つ古い民家を見た。かつてニシンの建網の船元であった家で、小納屋（こなや）といった。郷土資料館として使われていた。そのすぐ近くの一軒の雑貨店で、年寄りの女性に会った。小納屋のおかみであった人。女性はヒデさんといった。

「私は大正元年八月の生まれ。道南の乙部（おとべ）というところ、江差の北の町の生まれで、親は漁師でした」

ヒデさんは一一のときから三味線を習った。一六のとき芸者になった。しばらくあちこちを渡り歩き、昭和二五年に島へ来て、小納屋の後添いに入ったのだ、と話してくれる。

「小納屋はニシンの建網をやっていました。大勢の人、雇っていましたね。網を三かど（三ヵ統、統は建網を数える語）やってたから、一〇〇人ぐらいね。女の人はモッコしょいをやったね。モッコは板の箱でね。それを背に負って運ぶんだね。身欠きニシンを作って、そのほかはニシン粕にしてね。これはいったん煮て、絞って玉にしてね。それを包丁で刻んで、粕干しをしました」

海を眺めながら、こんな思い出話を聴く。豊かであった北の海、そして這い蹲（つくば）るようにして働き続けた人びと、これらが綯い交ぜになって想像された。帰りぎわ、ヒデさんは戸棚から愛用の三味線を出してきて爪弾く。佐渡おけさのひと節を歌ってくれた。江差追分を所望したが、あの歌はすぐには歌えない、と言う。江差追分は何度も歌い込まないとうまく出てこないよ、と言って笑った。爪弾く三味の音も笑い声もみんな一つになって、北の果ての海に吸い込まれていった。店先に腰掛けて、ヒデさんと話したあの

日のことを、二〇年たった今も忘れずにいる。

天売島で見た島の断崖絶壁の神秘的といってもよい風景も鮮明に思い出される。ウミネコが舞う島であった。ここでも女性から話を聴いた。ウニの種苗を放流していることが話された。

「ドングイの葉を集めましてね」

この言葉をすぐには理解できなかったのだが、ウニの種苗を水槽で育てるときに、オオイタドリの葉を餌にするのだそうである。ドングイはオオイタドリのことであった。焼尻では、この葉が戦中、タバコの代用になったと教えられた。時代が変わると用途も変化する。草の葉一枚が島の歴史を語っていた。

その島特有の暮らしがあり、それぞれがかけがえのない人生模様を紡いできているのである。これこそが、「島」の魅力だ、人の暮らしこそが文化だ、その島だけにしかない、独自の「島の文化」を求めて歩こう、このように思ったのである。天売、焼尻で、私は多くを学び、ここを出発点として次の島を探した。

船がともづなを解いて岸を離れるとき、別れの曲が流れた。

北海道天売島の岸辺で。

熱海の沖の初島で会った女性、かつては海女として働いた、三重県鳥羽出身の人。

浮かぶ面影、なぎさに追えば
汽笛せつない　おろろん鳥よ
オロロン　オロロン　波の上

今もこの歌は歌われているだろうか。島で話の相手をして下さった人びとは今いずこ。ちなみに、おろろん鳥は天売島のシンボルともいうべき、ウミガラスのことである。

島でめぐりあった人の顔が浮かぶ。どの人もみなそれぞれの自分史を抱えた顔を持っていた。苦難の跡は長い歳月によって洗い流されたのか、どの人もおだやかな顔立ちであった。

熱海の沖の初島で会った人は、志摩からテングサ採りに出稼ぎで来ていた海女であった。偶然の出会いであったが、ひとり暮らしを大根づくりで日を送っているという。縁あって島へ嫁いで、今八八歳である。

瀬戸内海の鴻島で話を聴いた女性は、宿で朝食のとき、島にこんな人がいる、と教えて貰ってから訪ねたのだった。縁側で聴く話は、亭主は戦死、三人の子を抱えて鴻島で畑仕事をした苦労話であった。船の櫓を漕ぐ稽古をした。漁に出るのではなく、日生（ひなせ）へ下肥（しもごえ）をもらいに行くための船漕ぎであった。

「日生へね、櫓漕いで二時間はかかりました。下肥を貰い

広島県豊島の岸で憩う漁師たち。

に行きました。担桶（たご）で荷のうてきては、船の胴間（どうま）へあけてね。肥を運ぶ小まい船がありました。島へ着いては、また担桶で汲んで畑の壺まで運んだですわ」

「あと遺骨やというて届きましたけど、骨箱には爪と髪の毛が入っていました。死ぬのを見届けたわけやなし、本人の爪やら誰のやらわかるもんかと思って泣けました」

この女性は海へ出ては枡網の仕事の手伝いをしたと話す。竹を丸く立てる。まんたいという袋があって、それへ魚を追い込むのだと体験を話してくれた。呟くように話した次の言葉を今も思いだす。

「電気はない、水はない、金もない、お父さんもない、あるのは子どもだけや、と言いながら必死になって生きてきました」

離島で生きる女の姿がここにあった。

一隻の船の中で家族が暮らしながら魚を追い、島影で一夜を過ごすといった生活を続ける家船（えぶね）のことを聴いたのは長崎県の崎戸島であった。お産も船の中で産婦一人で子を産んだという。一年も出生届が遅れた人が何人もいた、と告げる島の人の声は小さかった。広島県の豊島（とよしま）でもかつて家船に乗っていたという人に会った。中学なんか行くもんですか、とあけっぴろげに語る。屈強な体つきの漁師であった。間口一間というような小さな建物の漁協の二階で、渡り鳥のアビが魚の群れを追って集まる習性を利用する、

「アビ漁」のことを話してくれた。その漁師から、ずっと以前、私の町に古船を買いに行ったことがあったことを聞き、その偶然に驚く。海はひと続きだと実感したのだった。島の岸壁で憩う何人かの漁師を見た。

対馬の南の果て、浅藻（あざも）で会った女性は、少し耳が遠くてと言う。梶田富五郎の長男の養女になった人である。富五郎は『忘れられた日本人』の中のいわば主人公ともいうべき人だ。宮本常一氏がここで対面した人である。

「私は宮本先生が来られたときの姿をはっきり覚えていますね。富五郎じいちゃんと宮本先生の話はね、もうずっと止まらないんですよ。いつまでたっても終わらなかったです。どっちも生まれが、山口の周防大島でしょう。島の言葉で話し続けていたですね。私がお茶を持って行っても、もう夢中になって話しているんです。お昼も食べずにね。どこの人かわからんしね。どこのおじさんじゃろかね、じいちゃんのお客、まだおるばい、まだおるばい、腹減っただろうにまだおるばい、と言ってね」

はるばるとたずねた島の果てで、こんな収穫がある。これこそ、島歩き、漁村めぐりの旅冥利というものであろう。

豊かだった島の暮らしを物語る瀬戸内海の古い石垣の集落

二〇一〇年の夏に、瀬戸内海で海上保安庁のヘリコプタ

フェリーの人に手を振る佐柳島の人たち。

ーの墜落事故があった。その海を渡って佐柳島をたずねた。そこは長崎と本浦（ほんうら）の集落に、合わせて一〇〇人あまりの人が住む。帰りの船に乗る時、少しの時間であったが本浦の自治会長をしている藪陽（やぶあきら）さんから、あのときの話を聞いた。

「人で人で大変でした。取材の人が押しかけるわ、保安庁の役人がやってくるわでね。地区の老人総出で手伝いしたんです。一週間は停電か、と心配したんですが、仮設の電線が海底から来ていて助かりました。停電は三時間だけでした。ここはどの家もオール電化の生活なんです。その点からは都会よりクリーンですよ」

本浦には漁師はいない。三人ほどいたが亡くなってあとがない。その人たちも都会で働いていて、定年後、故郷の島へ来て始めたが、体ができていないのに、無理をしたのだろうと言う。欲と道連れがたたったんだと笑った。船が着く時刻になったら、どこからともなく人が集まる。奥さんが冷たいものでもとお茶を持ってきてくれた。一二月からは民生委員の役がまわってくるらしい。藪さんは七〇歳近いが、ここではヤングのほうです。と笑う。何人かの人が初めてである船の上の私に、手を振って見送っている。小中学校はとっくに閉校し、郵便局も民営化になってすぐ閉鎖された。このような島が日本には幾つもあるに違いない。それでもそこに腰を据えて暮らさなければならない人びとがいる。小型フェリー四便の暮らしだ。不便でもたくましく、どっこい生きてる人びとをここで見た。

高見島に建つ豪壮な民家。石積みが美しい。

高見島へ寄った。一泊した民宿の主はタイラギ（大型の二枚貝）をとっている漁師であった。潜水夫である。今は息子と孫があとを継いでいるらしい。タイラギ漁は冬で、それまでの秋の漁はもっぱら底曳網で、タイやシタビラメをとる。マダコも入ると言う。三世代同居の漁師一家とは珍しいと話しかけたら、息子が早く結婚したのでね、と笑う。

夜明けから雨が降る。雷が鳴った。朝の船便は欠航と貼紙があった。波もないのにと先を急ぐ者には少々不満である。土曜日で通学、通勤の客もないから、雷鳴にかこつけての欠航か、と下種（げす）の勘繰りをする。昨夜、宿で聞いた古

い石垣の集落を見ようと、坂道を登る。閉校した学校がある。しばらく行くと目を見張るばかりの石積みがあり、その上に豪壮な建物が海を望む位置に建つ。一〇〇〇円出せば栄耀普請といわれた時代に、あそこは三万円かけたそうだから、と宿の主が言ったが、嘘ではなかった。古い石垣がずっと続く。道は人ひとりがやっとというだけの細道である。いちばん奥に老夫婦二人が住む家があった。人が住むのは、そこ一軒だけ、下の方に二軒ほどあるとは、途中で出会った国勢調査の調査員に教えて貰ったことである。豊かであった島の暮らしを語る石垣と民家、何が隠れているかわからない。塩飽諸島高見島への寄港が、それを教えてくれた。見事な石垣が語る島の文化を目の当たりにしたのである。

ブナ林が豊かな海を守っている北の島にて

「私はね、中国からの引き揚げ者ですよ。昭和一四年生まれです。父親が中国で除隊になってね。大工だったからそのままあちらで仕事をしたんです。母に連れられて私も中国へ行ったですよ。妹はあちらで生まれました。引き揚げが大変でしたね。私なんか男の子にさせられて、坊主頭でね、声を出しちゃいかん、声を出すと女の子だとわかるから、といわれてね。どうして男の子にさせられたんだろうと思いますけどね。女の子だと中国の人にさらわれるからと思っていたんですかね。苦労の末に佐世保へ上陸しました。山にいっぱい夏ミカンがなっていてね。私がそれをほしいとねだったんですね。父が売ってくれといっても売ってくれない、私は食べたいとぐずるばかり。父は時計を出してそれと交換して、私に食べさせてくれましたね。中国から孤児が親を探しにやって来ますよね。あのニュースだけは見逃さないですよ。妹とよく言うんだけど、ここに居られるのが不思議なくらいだね、私たち幸せだね、と話したりしましてね。

何日かかってやっと江差までだどり着いてね。父の母親が江差にいました。祖母は旗竿に、父の名前と私の名前

晩秋の奥尻港、フェリー着岸。

奥尻港の南すぐの海辺に立つ鍋釣岩（なべつるいわ）頭上に生える植物は、小さな赤い実をつけるヒロハノヘビノボラズ。

川口祐二（かわぐちゆうじ）

1932年三重県生まれ。1970年代はじめ、漁村から合成洗剤をなくすことを提唱、実践運動を展開。日本の漁村をあるき、とくに戦前・戦中の女性の暮らしを記録する仕事を続けている。現在、NHKふるさと通信員、海の博物館評議員、三重大学客員教授。『渚ばんざい』『光る海、渚の暮らし』『石を拭く日々』『甦れ、いのちの海』『漁村異聞』『島をたずねて三〇〇〇里』（ドメス出版）ほか著書多数。

かげで、大須田コヨさんに会うことができた。大須田さんはひやま漁協の女性部奥尻支部長として活躍している。快活この上ない人である。東京暮らしが長かったと話される。そんなわけでかポンポンといった感じの話しぶりである。

「女性部長をしろと言われたときは、海のことなんにも知らなかったけど、何でも体当たりでやれば身につきますよ。初めはね、イカというのは耳からあがってくるもんだと思っていたの、そしたらさ、足で針包んだようにしてあがってくるでしょう。わあと声立ててびっくりしたの。父さんに何言ってるんだと言われましたね。カレイの釣れるのも面白いこと、引き釣りのようにしてやるんですね。ムール貝の小さいような奥尻ではヒロケと言っている貝の身で釣りますね。茶わんを逆さにしたような重りの両側二方に釣針をつけて、それを底まで落としてね、ちょっと引き揚げて、また落とすんです。カレイが食らいつく加減が最初はわからなくても、何回かやるうちに勘でわかるようになりました。ホッケが食いつくと引っ張っていくように感じますしね。釣りあげていて、途中まであがってくると、カレイだったら、腹の白いのが見えてくるから、楽しいものですよ」

を書いた旗つけて、子どもたちが帰ったよう、と竿振って歩いたですよ。江差も今のように立派な港じゃなかったし、砂浜からはしけで本船に乗って奥尻へ帰ってね。二年生の六月ぐらいでした。途中で島の小学校へ入ったんですよ」

これは奥尻島で聴いた話。思いがけない話であった。二〇一〇年一一月五日、奥尻町役場の満島章さんの紹介のお

大須田コヨさんは、ウニの塩漬けの名人でもある。いろいろ試行錯誤の末、やっとたどりついた、と語る。冷蔵庫から、たった一びんあるというのを出してきて、フォークで掻き出すようにして小皿に盛ってくれた。少し解かしてから口に入れた。甘い、と私が言えば、甘いでしょう、とそこは自信たっぷりの返事であった。

奥尻の山が赤く燃えるようであった。ざっと降っては止み、雲が切れて、晩秋の陽が山を照らした。津波が来た青苗の岬に立つ。昔あった七〇戸ほどの集落は高台に集団移住している。跡地にできた美しい園地に冷たい日本海の風が吹く。

島のいちばん北をめざす。稲穂岬、賽の河原という突端である。

宮津弁天近くから望む奥尻島北部崖ノ岬方面。

奥尻島の北の果て、賽の河原。

ここでも雲の切れ間から夕陽を見た。波が浜を洗う。小石が積みあげられている。石の小山が無数に並ぶ。私も丸い小石を二つ三つ拾って積みあげた。波の音だけの世界であった。奥尻の港の近くには、鍋釣岩（なべつるいわ）がある。奥尻は奇岩の島ですね、と、私は道案内の満島さんに声を掛けた。

「西海岸には、次つぎと形の違う岩や島がありますよ。それと私たち住民の自慢は、ブナ林があることです。ブナかと言う人もいますけどね、これは豊かな海を守る上でのいちばん大事にしないといけないものなんですよ。ブナの森は奥尻島の宝です」

夕暮れ迫る賽の河原に佇つ筆者。

この満島さんの言葉を私は忘れずにいる。

北の果てともいうべき奥尻の島歩きは、たった一日だけであったが、明るくやさしい人たちに会えた島の旅であった。私は、もう一度おたずねしたいです、と礼状を書いた。それはお世辞ではなく、どうあってももう一度行きたいという思いがあるからだ。次はどんな偶然に出会うだろうか。心に響く何かを、島への旅は用意してくれている。■

（参考図書）
岩波新書別冊2『私の昭和史』（一九八八年二月）
『島に吹く風』（一九九三年七月）／『光る海、渚の暮らし』（二〇〇四年一一月）／『島をたずねて三〇〇〇里』（二〇一〇年六月）　以上、川口祐二著　ドメス出版刊